

Association for Asian Studies と その年次大会

Association for Asian Studiesは、*Far Eastern Quarterly*の出版団体として1941年に設立され、のちに活動の射程をアジア全域に広げた学会組織である。日本語では「アジア学会」「米国アジア研究協会」などと訳されることもあるが、むしろ略称の「AAS」で通っている。現在では約8,000名の会員を擁する点で、アジアの地域研究のなかで世界最大規模を誇る学会だ。*Journal of Asian Studies* (季刊)と*Education About Asia* (年3回)の2つの査読つき英文誌を発行し、学会賞の選考と、年次大会の開催をおもな事業としている。年次大会は、毎年3月下旬や4月上旬に、米国カナダで開催される。2014年からは、「AAS in Asia」も、初夏にアジアのどこかで開かれている。

今年の年次大会は、3月22日から25日まで、ワシントンDCにあるマリオット・ワードマンパークでおこなわれた。公式発表によると、参加者はスタッフを除いて2,208名、セッション数は437で、全セッションを合わせた発表は1,449件にのぼった。26作の映像作品も上映され、団体や書店などが94軒のブースを出した。各種の講演、分科会総会、授賞式、レセプション・パーティー(同窓会や外部財団主催も含む)も恒例である。

年次大会では個人発表、パネル、ラウンドテーブル、ワークショップのセッション

が公募されるが、採否の審査は厳しい。今年の年次大会に採択されたセッションを、申請時の学問領域や研究地域で分類すると、表1と表2のとおりだった。ここで注目すべきは、何より超域/越境(Inter-area/Border Crossing)のセッションが多いことだ。AASは特定の国や地域に焦点をしない学会である。そのため、多様な研究地域の組み合わせが、強く期待される。同様に、学問領域や所属先(所属機関、その所在国)などに関しても、ダイバーシティにもとづく協働を大切な理念としている。

じつは、これに配慮せず個人発表以外の枠に申請をおこなって、不採択の憂き目にあう研究者が多いという。これまでに筆者はAASの年次大会に3回参加したが、パネルの一員として申請した2回は、どんなパネルを誰と組むか、慎重を期した。2016年の年次大会で起案者を務めたパネルGenerational Sentiments and Negotiated Realities in South Koreaでは、研究地域を朝鮮半島とする代わりに、香港研究の発表者を迎えて比較研究の姿勢を取り入れ、音楽学の発表者や社会学の討論者に登壇してもらうことで学問領域もミックスした。発表者として参加した今年のパネルExperimental Livelihoods and Alternative Socialities in Contemporary Japan and South Koreaでは、学問領域を人類学だけにしたものの、

韓国研究者2名と日本研究者2名で超域/越境のパネルとして申請し、歴史学の中国研究者に討論を頼んだ。どちらの年も、それぞれ4名のパネル発表者は、国籍までバラバラにした。メンバー構成を理由に組織委員から大きなマイナス点をつけられたのでは、

パネル全体や各発表の内容をよほど作り込まない限り、かなり採択されにくいからだ。

こうしたダイバーシティ要件は、近年の運営陣によって、さらに強化されているとみられる。2019年の年次大会の申請要綱は、各セッションのジェンダーと地位(大学院院生、常勤教員、非常勤教員など)に、ダイバーシティを要求している。また、同じ所属機関から同じセッションに関わる人数も、2名までにしてほしいそうだ。これらを満たさないと、「審査過程とセッション自体で重大な不利益となり、自動的に不採択となるリスクもある」とある。

ただ、そうした人選の労を差し引いても、AASの年次大会は、参加する価値があろう。第1に、各自の関心事に近い研究動向に接しやすいからだ。じつは、今年の年次大会では筆者の発表主題が記念講演の内容とほぼ重なり、かつ他のパネルの全体主題にもなっていた。それぞれに違うバックグラウンドとデータに基づく同じテーマの発表を、これほど聞きあえるのは、なかなかないことだろう。第2に、米国人類学会などの同規模の年次大会に参加するより、効果的にネットワークを構築できるように思う。今年は筆者も、事前に抄録集を見て、直接会ったことがない研究者たちとアポを取りあっていた。入れ替わり立ち替わり、彼/彼女らとロビーで話しこんでいたら、そこへ相手のアポ相手加わる。驚くべき勢いで輪が広まった。おかげで、知的な刺激を受けるだけでなく、各国の研究動向や文献もたくさん紹介してもらえたり、講演のお誘いまでいただけた。来年は一緒にパネルを組むことを検討したいという話も出て、良い連鎖も生まれていく。このように、初めて出会った人とでも話題が尽きないことが多いのが、AASの年次大会の最大の魅力なのかもしれない。

表1 セッションの学問領域の分布(複数回答可能)

人類学	63	語学	4
考古学	10	法学	10
美術・美術史	22	図書館学	1
アジア系米国人研究	1	言語学	1
経営学	1	文学	32
映像・映画研究	19	音楽・音楽学	4
コミュニケーション学	11	パフォーマンス・アート研究	5
経済学	13	哲学	9
教育学	4	政治学	38
ジェンダーとセクシャリティ研究	19	人口学	3
地理学	23	宗教学	29
歴史学	112	社会学	39
情報工学	2	通訳学	6
国際関係学	13	都市研究	12

表2 セッションの研究地域の分布

超域/越境	136
中国・内陸アジア	139
日本	57
朝鮮半島	20
南アジア	42
東南アジア	43

文・表 太田心平

国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授。アメリカ自然史博物館上級研究員。専攻は社会文化人類学、北東アジア研究。共編著書に『東アジアで学ぶ文化人類学』(昭和堂2017年)、『한민족 해외동포의 현주소: 당사자와 일본 연구자의 목소리』(學研文化社2012年)がある。